

時の中で、時を超える

(伝道者三・一〜一四)

昨年末「ジヨブ・チユーン・お寺・神社・教会SP」なる番組を見た「なかなか面白かった。残念だったのは仏教界の代表達が三〇〜四〇代と若かったのに対し、キリスト教の方は森本、来住(きし)の両氏ともに六〇代であったこと。両氏とも日本のキリスト教を代表する論客ではあるがやはりというか、当然というか「ハジケ方」が足りない。実に残念だ。

閑話休題。そうしたお寺関連のテレビなどで有名な僧侶に大來(おおき)尚順氏という方がいる。ハーバードに留学された華々しい経歴もあつて大人気の彼だが、中には『英語でブッダ』なる本も出している。その中で諸行無常は Everything including myself is constantly changing と訳すのだという。なるほど確かに解りやすい。時にキリスト教の中にもこの諸行無常によく似たことばがある。それが今朝の個所である。以下我々人間のもつ三つの現実について考えたい。

一、時の制約の中に生きる人間

三章一節はこの書物を書いた伝道者(よくンロモン王と目される)の得た人間観察の結果導き出された主張であり、

続く二〜八節はその具体例である。それを読めば確かに人間は生まれることを拒否することは出来ないし、死なないことを選択できない。人生はまた喜怒哀楽の連続であるし(四節)、事業を始めたたり終えたり、燃える愛に身を焦がしてみたり、すつかり冷めてみたり(五、八節)と確かに全ての営みには時がある。ひよつとしたら若い時には「自分は何でもできる、可能性は無限大だ」と思っている人もいたかもしれないが、腰を痛め、老眼も進んでくるとやはり「時」を意識せずにはおれない。この伝道者はブッダ同様、天が下にある人間のあらゆる営みを見、そこにどうしようもなく時の制約の中を生かされている人間存在の現実を認めたのである。

二、時を超える思いを与えられた人間

しかし伝道者の観察はそこに留まらない。一一節には「神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。」とあるとおりである。ちなみにこの永遠と訳されたことばは翻訳が難しいそうで、学者たちは「世界」「知識」「労苦」「忘却」などの訳語を当てているようだが、ここでは主要な翻訳に従い、永遠で解釈を進める。確かにブッダもこの伝道者も「時」に翻弄される人間、また流転していく世界を見つめていた。

そしてブッダはその生滅へのとらわれを滅ぼして解脱することを説き、伝道者は人間には神によって、この諸行無常の世の中にあつても永遠なるものへの思いや憧れを与えられていると説いた。確かに聖書によれば人は「神のかたち」に造られているのだから(創一・二七)、永遠の存在である神を思いめぐらすことが可能だと考えるのは聖書の論理に適っている。

三、神の善性を告白できる人間

しかし伝道者はこう続ける。「しかし人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることはできない。」永遠を思う心は与えられてはいるものの、永遠の神のみわざの全てを見ることは出来ない。ある意味当然である。人間は神ではないからだ。では伝道者はどうして大胆にも「神のなさることは、すべて時にかなつて美しい」と語る事が出来たのだろうか。答えは簡単である。彼はその命題を信じたのだ。ここに人間のすばらしさがある。人間は神の善性を信じ、それを告白し、さらにその告白の上に生きることが出来る。そしてこの信仰の上に立つて生きていくとき、人はたとえ「時がよくなくても」その中に幸せを見出し、人生を謳歌することが出来るのである。興味深いのは伝道者がそれを神の賜物と呼んでいることである(一三節)。この神の善性を単純に信じ、労苦の中にしあわせを見出すことを神の賜物とする考え方は、新約聖書においてより先鋭化された形で展開されている。

ある(一三節)。この神の善性を単純に信じ、労苦の中にしあわせを見出すことを神の賜物とする考え方は、新約聖書においてより先鋭化された形で展開されている。

* * *

間もなくあれから八回目の三・一がやってくるが、私の脳裏には今も忘れられない「ことば」がある。それは写真家の藤原新也さんがアエラ誌に写真と共に寄稿した「神様消滅」というエッセイである。被災地にいち早く入り、幾百の屍を見た彼は言う。「これは罰があつたのではない。神はただのハリボテであり、そこにはそもそも神なる存在はなかつたのである。神幻想から自立し、自らの二本の足で立つとうとする者ほど強いものはない」しかし本当にそうだろうか。勿論この未曾有の大災害を軽々に「罰」として語るのには避けねばならない。私たちは永遠の神ではないのだから。だが神を消滅させたところで真の希望は出てこない。なぜなら人間のあらゆる希望の源は神にあるからである。だから「神のなさることは、すべて時にかなつて美しい」そう告白できる私たちは幸せだ。そのように信じて生きるならば虚無と冷笑の闇を切り裂き人生の妙味を存分に味わえる。神の善を、今信じよう。